

継続，継続，継続調査

中村 隆

情報・システム研究機構 統計数理研究所 名誉教授

統計数理研究所（以下、統数研）に私が入所したのは、「日本人の国民性調査」第6次全国調査が1978（昭和53）年秋に実施されてから半年ほどたった頃であった。統数研は当時まだ文部省所轄の研究所（1944（昭和19）年設立）で、「国民性調査」は統数研が1953（昭和28）年から5年ごとに全国調査を実施してきた継続調査（反復横断調査）である。

国民性調査には、当時の林知己夫所長を始めとして、西平重喜さん、水野欽司さん、鈴木達三さん、坂元慶行さんから携わり、他の多くの所員が調査に駆り出された。入所の頃は第6次調査が終わり、その集計と分析のまった中であった。私は右も左もわからない状況であったが、それでも早速、鈴木さんの薫陶の下、岐阜パネル調査（1979,80年）の実施を手伝うことになった。この調査は、国民性調査の吟味調査（関連調査）の一貫として行われたもので、半年の期間を空けて同一対象者に調査を行い、個人の回答変動を把握しようとしたものであった。

社会調査に関係するのはこの時が初めてというわけではなく、東京工業大学の学部時代に、当時助手をされていた海野道郎さんの縁で、10年ごとに実施されている「社会階層と社会移動全国調査（SSM調査）」の1975年「B調査：職業威信」の調査員として一地点を担当したのが最初である。継続調査であるSSM調査については、統数研入所後に1985年と1995年の調査で、サンプリングの計画を手伝うことになる。その他の経験としては、修士時代に同期の院生と、都内23区の高校生とその母親を対象とした「高校生の進路選択に関する調査」の企画・実施がある。

統数研では、継続調査データの分析法である年齢・時代・世代効果を分離するコウホート分析法を研究の中心に据えて過ごすことになった。それは第1に入所時すでに「国民性調査」という継続調査データの四半世紀に及ぶ蓄積があったお陰である。その蓄積と、統数研の赤池弘次さん、坂元さん、石黒真木夫さん、北川源四郎さんたちが精力的に取

り組んでいた情報量統計学の融合によってベイズ型コウホートモデルが生まれた。統数研の大型計算機を自由に使えたことも大きく、第7次調査の実施前（1982年）には論文を発表することができた。

NHK放送文化研究所の「『日本人の意識』調査」は、「国民性調査」と同様の継続調査で、1973（昭和48）年以降5年ごとに国民性調査と同年に実施されている。この継続調査については、第4回の1988年調査が実施された後、蓄積データにコウホート分析を適用する共同研究を開始し、続けてきている。

国民性調査は、第8次の水野さん、第9～11次の坂元さんに続いて、第12,13次調査の実施代表者を務めた。曲がりなりにも務められたのは、調査の実査からホームページの作成まで、前田忠彦さん、土屋隆裕さん他の方々の多大なサポートのお陰であった。今秋（2018年）には第14次調査の実施が控えている。

さて浅はかながら、国民性調査は世界最古の継続調査であると思い込んでいたところ、2010年にそうでないことを思い知らされた。1950年以降ほぼ20年ごとに実施されてきた「鶴岡市共通語化調査」の存在である。第1回（1950年）、第2回（1971年）調査では、国立国語研究所と統数研のメンバーが密に協働してサンプリングや調査の実施を行っていたのである。そして第4回（2011年）調査を再び両研究所の協働で実施することになった（この時点では世界最古かつ最長の継続調査）。第3回調査までの結果で共通語化率の世代別推移を見るだけで世代効果が大きいことは一目瞭然であったが、第4回調査の後、蓄積データをコウホート分析することによりそのことを明瞭に示すことができた。

以上のように、多くの継続調査に関わってこれた研究人生であった。継続調査を継続させるのは、第1に世代交代が避けられないもの「人」であり、つづいて人をまとめる「組織」、調査を支える「予算」である。継続調査が今後も継続されることを祈念している。



Column
社会調査
の
あれこれ

アーヴィング・ゴフマンと 社会調査

中河伸俊

関西大学総合情報学部 教授

少し前に、志をともにする人たちといっしょに、『触発するゴフマン』という本を出した(中河伸俊・渡辺克典編, 2015, 新曜社)。アーヴィング・ゴフマンについての先行の論集が、いわゆる理論的な関心に重きを置いたものだった(安川一編, 1991, 『ゴフマン的世界の再構成』世界思想社)のに対して、経験的な調査研究に「使える」ゴフマンをアピールするのが本書の狙いだった。翻訳を含められなかったため適切な見本はあまり示せなかったが(欧米の「質的」研究でのゴフマンの概念や視点の応用例は枚挙にいとまがない)、とはいえゴフマンの実用推進への扉を改めて開き直すことができたと自負している。

ゴフマンの学的な出発点は、いまでは広く知られているように、デュルケミアンの社会人類学だ。晩年に至るまで「自然主義的」なアプローチ、つまりは、現地に没入しての参与観察を基調とするオーソドックスな調査スタイルにコミットし、それに即して院生を指導した。彼自身、まとまったフィールド調査を三度行っている。博士論文の題材になったシェットランド諸島(のUnst島)と、彼の著作『アサイラム』を生むことになるワシントンD・C・の精神病院、そして、中期の著作で散発的に知見が引かれるネヴァダのカジノの、三つの現地での観察がそれだ。ただ、ゴフマンがその先駆者として開拓し、豊富な遺産をのこした相互行為秩序の探究と、そうした正統派の民族誌的調査へのコミットメントを見比べるとき、一種のミスマッチ感はぬぐえない。そもそも、ゴフマンのシェットランドでの調査を踏まえた博士論文(『行為と演技』をはじめ後の多くの著作の着想の母胎になった)自体が論文審査時に、そうしたミスマッチを指導教員たちから論難されたという(「これはあの島の住民の社会生活ではなく、日常的な相互行為とコミュニケーション一般の研究じゃないか!」といったように)。

筆者は、ゴフマンが主著の一つ『フレーム分析』

で提案した研究プログラムを経験的に「使える」ようにするにはどうしたらいいのかを思案するうちに(『触発するゴフマン』所収の拙稿「フレーム分析はどこまで実用的か」)、そうした古典的な集中的フィールドワークとは違った、日常生活の中での気付きを書き留める“日常経験のフィールドノーツ”書きという手法が、より適切なデータを蓄積するための早道ではないかと考えるに至った(萌芽的な例については拙稿「談話標識としての笑いと『お笑い』」(2016, 『同志社社会学研究』20)。筆者は、ゴフマンのフレーム分析は、エスノメソドロジーと会話分析の知見と組み合わせはじめて、人びとの多種多様な社会生活の基盤を読み解く有効な武器になると考える。が、会話分析やビデオ分析には、機材をセットした(することが可能だった)場所と場面での調査という制約がある。したがって、それらと併せて、フィールドノーツを書くというオーソドックスな手法を援用する必要がある。日常生活の中で、研究者の分析的関心に対応する相互行為的出来事に会ったとき、そのやりとりの詳細と文脈についての手短な記録を書き留め、保存しておくといい。そうしたデータは、相互行為的に作り上げられる私たちの「現実」の多種多様な側面を分析する道具(例証)として、大いに有効であるはずだ。そして、そうした調査技法もまた(没入という前提さえクリアしていれば)、「社会的な状況に溶けこんで、自分の身体と感性とを、その状況の測定器として使え」というゴフマンのフィールドワークについての教えに即したものである。

